

Multidimensional

国谷 隆志 Kunitani Takashi

2019年9月20日[金] — 10月6日[日]

11:00_19:00 / 金曜日のみ11:00_20:00 / 月曜日休廊

*10月5日[土]は「ニュー・ブランシュKYOTO 2019」のため22:00まで開廊。

2019.9.20 Fri._10.6 Sun. 11:00_19:00 / 11:00_20:00 on Friday / Closed on Monday

*Open until 22:00 on October 5 for [Nuit Blanche Kyoto 2019]

[introduction]

美術家・国谷隆志(くにたに・たかし/1974年・京都生まれ)は、『人間の空間への関わりにおいて、自分を取り巻く世界、物事についてのあり方を問うこと、さらに人はそれらとどのように向き合うのか』に関心を寄せています。その作品はいずれも鑑賞者に自らの身体(肉体・主体)の「位置」への自覚を促すことを主眼として、表現を展開させてきました。

国谷はおもにオブジェや彫刻を中心としたインスタレーションを作品として、展示空間をある「場」へと変換します。その「場」は内包する鑑賞者に働きかけ、そこに時間・空間・鑑賞者を分断、あるいは再構築させることを促します。また、近年のネオン管を用いた一連の作品は、光という現象による空間の変容だけでなく、文字を造形に、言葉を意味に解体・再構築する鑑賞体験により、展示空間だけでなく、私たちの日常や社会構造をも「場」として眼差し、そこに内包される「私」という因子の座標や振る舞いに思考を巡らせるきっかけを与えてくれます。

本展「Multidimensional(=多次元)」は、2階をX軸(水平)、3階をZ軸(奥行き)、4階をY軸(垂直)へと意識を向けた空間として構成されています。

2階のインスタレーション作品《Untitled》は、ネオン管による文字を用いた作品として国谷が2011年より展開させているものです。インフォメーションを目的とする一般的なネオンサインでは、その「正面」は「文字が文字として読める」側となりますが、それが伏せられた本作は、抽象的で有機的な「オブジェ」とするよりほかない存在となります。仮に鑑賞者がガラス台の下に潜り込み、体を窮屈に振って文字を「読んだ」としても、それは何ら意味を持たない語句(オークションサイト「eBay」のインターフェイス)であり、鑑賞者はそこに掴むべき意味を見失います。発光により「見ること」を強く求める本作を前に、読むことや思考することを諦めて、ただ目の前の在りようを眺めた時、鑑賞者はそこに青白い光によって染められた空間や、静けさすら感じる光りという現象の不思議を感じるができるのではないのでしょうか。

3階に展開する《Mirror Site》のシリーズ作品は、鏡面に仕上げたスチールの表面に、1cm間隔で罫線を引っ掻いて描いたもので

す。鏡面に写り込んだ展示空間と平面に描かれたグリッドを同時に目にした時、鑑賞者はそこに「奥行きのある空間」と「平面」との認識と視覚のズレに直面することになります。また、こうした制作行程により描かれた線を見るうちに、そこにやり直しの効かない緊張感を見出すこともできるのではないのでしょうか。

4階作品《Untitled》は、一般的に道路の側溝を覆うためのグレーチング(鋼材を格子状に組んだ溝蓋)をスタンドグラスに仕立てたものです。溝蓋であること以外の用途のない建材が、装飾を施されることでその本質を変容させられるとともに、普段は足元に眺めるだけの存在が直立させられた様子は、鑑賞者に日常的な認識と、目の前の「作品」と呼ぶしかない在り方を交錯する体験を促します。また、自然光を取り入れた展示による本展では、単なる建材が置かれた様子のほか、西日によるスタンドグラスとしての透過光の美しさ、夜の照明によるクールな佇まいなど、鑑賞時間によって様々な表情を見ることができるのではないのでしょうか。

私たちの認識し、知覚し得る「場」は、「三次元」や「時間」といったものだけなのでしょう。私たちはこれら比較的認識しやすい次元(dimension)を超えて、より多様で複雑な多次元の場に生きているのかもしれない。また、その多次元は数学的な空間としてだけでなく、私たちの想像や記憶、感性の広がる空間にも及ぶかもしれません。

それぞれの次元の広がり眼差しを引き込む国谷の作品を眺める中で、私たちは異なる次元に触れ、その存在を感じる事が出来るのではないのでしょうか。

[artist statement]

Multidimensional 空間と私の距離

国谷隆志 Kunitani Takashi

人間と空間は、深く複雑に絡み合った関係である。

空間というものの存在を考える上で、身体を抜きにすることは難しいだろう。それは、私たち人間の身体が常に空間の中に置かれているのと同時に空間を自らのものとすることによって環境を捉えているためだ。作品が身体感覚に働き掛けるとき私たちは思考によってそれを把握し、統合する。作品は単なる物質として捉えられるのみではなく、場として身体の一部となる。それは論理や認識のレベルではなく、内面的な領域へと思考を拡大していくことである。

私は、私の作品が観客の意識の中で新たな意味や世界観を創り出す装置のような機能をはたすことができればよいと考えている。観客が作品によって示される空間に立ったとき、身体を通じて観客自身の意識の中にかかる出来事は主體的であるために客観性に欠け、あまりに不確かなものかもしれない。しかし、このような場の感覚によって、「身体が、今、ここにある」ということを強く自覚する事ができると私は考えている。

私は、人間の空間への関わりにおいて、自分を取り巻く世界、物事についてのあり方を問うこと、さらに人はそれらとどのように向き合うのか、といったことに関心がある。人が占めている位置、身体、空間、時間、物の配置による人の視点や移動。これらは身体を起点とした観客自身の位置であり、場の感覚によって示されるものは、自らの存在を示すことに繋がる。作品の意味は観客の体験によって成立し、観客の参加そのものによって完成する。

あなたの存在と私の存在によって作品を完成へと導くことを、あなたの存在と私の存在の証明とする。

国谷隆志

[C.V]

- 1974.12 京都生まれ
- 1997.03 成安造形大学 立体造形クラス卒業

Solo Exhibition

- 2018.09 Spaceless Space (Ulterior Gallery / ニューヨーク)
- 2018.03 Something Red (京都芸術センター 大広間 / 京都)
- 2017.04 Pink Objects (Ulterior Gallery / ニューヨーク)
- 2016.12 Bai-in (松花堂庭園美術館 / 京都)
- 2015.11 Re- (OZASAHAYASHI / 京都)
- 2015.10 Channel 6, Deep Projection (兵庫県立美術館 / 兵庫)
- 2014.12 Momentary Shape (ART SPACE・NIJI / 京都)
- 2013.11 35°0' 31.7"N 135°45' 58.74"E (Gallery PARC / 京都)
- 2013.01 Shop Window (Street Gallery / 兵庫)
- 2012.11 make a mistake in choosing (Gallery PARC / 京都)
- 2012.10 two passages (京都芸術センター / 京都)
- 2011.10 PARC: Creator Support Project #2 MARS (Gallery PARC / 京都)
- 2008.07 Untitled Series (Contemporary And Spirits CAS / 大阪)
- 2007.12 The Vertical Horizon (大阪府立現代美術センター / 大阪)
- 2005.08 国谷隆志展 (Contemporary And Spirits CAS / 大阪)
- 2005.06 A piece of space: KUNITANI Takashi Exhibition (APS / 東京)
- 2004.11 Between Ground And Sky (YAEMON / 京都)
- 2004.06 What you have known for some time (ギャラリーココ / 京都)
- 2003.09 YOUR PRIVATE SURROUNDINGS (YAEMON / 京都)
- 2003.02 クリテリウム54 (水戸芸術館 / 茨城)
- 2003.01 Sparkle (ギャラリーココ / 京都)
- 2002.10 Nothing Like Object (ギャラリーそわか / 京都)

Group Exhibition

- 2019.01 Medium of Exchange (SHIRLEY FITERMAN ART CENTER (SFAC) at Borough of Manhattan Community College / ニューヨーク)
- 2017.09 ポスト・リビングルーム (SHIBUYA HIKARIE 8 / CUBE 1, 2, 3, / 東京)
- 2017.05 SEIAN ARTS ATTENTION VOL.9 UNCOVER (成安造形大学 / 滋賀)
- 2015.02 Light: fixtures and sculptures (LMAK gallery / ニューヨーク)
- 2014.10 twisted parallel code (Gallery PARC / 京都)
- 2014.08 COVER 3 (Contemporary And Spirits CAS / 大阪)
- 2013.06 Pavilion 0 (Signum Foundation Palazzo Donà / ベニス)
- 2012.11 アブストラと12人の芸術家 (大同倉庫 / 京都)
- 2011.03 モトコーART train (神戸元町高架下通商店街 / 神戸)
- 2010.09 NEW WORKS「接続熱源」(ギャラリーほそかわ / 大阪)
- 2010.04 Food for the senses (海岸道ギャラリーCASO / 大阪)
- 2008.11 LOCUS (神戸アートビレッジセンター / 神戸)
- 2008.07 Art Court Frontier 2008 #6 (アートコートギャラリー / 大阪)
- 2008.02 第11回 岡本太郎現代芸実賞 (岡本太郎美術館 / 川崎市)
- 2005.10 OMOTE - NASHI (YAEMON / 京都)
- 2005.10 City net Asia 2005 (ソウル市美術館 / 韓国)
- 2003.09 TAMA VIVANT 2003 (多摩美術大学 / 東京)
- 2003.05 NEW GENERATION 3 (海岸道ギャラリーCASO / 大阪)

Collections

竹中工務店東京本店、日本ビラー工業株式会社

[works]

[2F]

インスタレーション

《Untitled》

2019 ネオン管、ガラス、スチール、変圧器、コード サイズ可変

ドロワーイング

《Untitled》

2019 紙にガッシュ 60×48 cm

[3F]

《Mirror Site (Quinacridone Rose)》

2019 鏡面仕上げのステンレススチールに罫書き、アクリル、パネル 17×11×4.1 cm

《Mirror Site (360)》

2019 鏡面仕上げのステンレススチールに罫書き、アクリル、パネル 20×18×4.1 cm

《Mirror Site (500)》

2019 鏡面仕上げのステンレススチールに罫書き、アクリル、パネル 20×25×5.6 cm

《Mirror Site (234)》

2013 鏡面仕上げのステンレススチールに罫書き、アクリル、パネル 18×13×3.5 cm

《Mirror Site (117)》

2019 鏡面仕上げのステンレススチールに罫書き、アクリル、パネル 13×9×3.1 cm

《Mirror Site No.1》

2013 鏡面仕上げのステンレススチールに罫書き、アクリル、パネル 100×50×7.5 cm

《Mirror Site No.2》

2013 鏡面仕上げのステンレススチールに罫書き、アクリル、パネル 100×50×7.5 cm

[4F]

《Untitled》

2019 グレーチング、スタンドグラス、はんだ 24.5×25×3 cm

《Untitled》

2019 グレーチング、スタンドグラス、はんだ、台座 24.5×33×16 cm

《Untitled》

2019 グレーチング、スタンドグラス、はんだ 100×14.5×3 cm

《Untitled》

2019 グレーチング、スタンドグラス、はんだ 40×14.5×3 cm

《Untitled》

2019 グレーチング、スタンドグラス、はんだ 24.5×100×3 cm

《Untitled》

2019 グレーチング、スタンドグラス、はんだ 24.5×25×3 cm

《Untitled》

2019 グレーチング、スタンドグラス、はんだ、 13×15×11 cm

《Untitled》

2019 グレーチング、スタンドグラス、はんだ 88.5×80.5×4 cm

《Untitled》

2019 グレーチング、スタンドグラス、はんだ 88.5×80.5×4 cm